

【漢検漢字文化研究奨励賞】優秀賞

字音から見た三卷本『色葉字類抄』『仏法部』の性質

国立国語研究所 特任助教 藤本 灯

はじめに

平安時代院政期に成立した国語辞書である三卷本『色葉字類抄』（以下、字類抄）の収録語彙の性格については、従来の研究の結果、古記録・古往来を中心とする漢字文献、漢詩文類、仏教説話集等の和漢混清文にその用例の見られることが確認されている。しかし、語の性格―延いては出典を、用例以外の視点から調査した研究は、未だに乏しい。

そこで本稿では、字類抄二部中一五番目の「暁字部」の中でも特殊な「仏法部」語彙（全二二六語）を取り上げることとする。仏教に関わる語群に付された音注―典型的な仏典「注一」より抄出した語であれば、一般には呉音が期待される―を分析することにより、当時代における字類抄語彙の位置を確認することが目的である。

第一項 仏法部語彙の概観

字類抄の「暁字部」は、音読語の収録語数が五〇一六語（中田・峰岸一九七七）と大部であり、二字以上の漢字語を収録するという内容もそれ以前の「字書」と比較して特徴的である。また暁字部内では「部」「分」に意義分類され（「分」は存在しない場合がある）、概ね整然と排列が為されている。

「部」：天部・地部・山岳部・河海部・神社部・仏法部・帝王部

↳ 灯燭部・牛馬部・雑部・両合部・長暁字の全三九部。

本稿で扱う、暁字部中の「部」の六番目に位置する「仏法部」には、次のように下位分類の「分」が存在する。

仏法部の「分」：①釈教分 ②内典分 ③寺家分 ④法会分 ⑤僧侶分

以下に、「仏法部」語彙の本文を示し、後に【表一】篇別項目数・【表二】「分」「名」別項目数を示す。これらを元に、次項では、語に付された音注を具体的に検証する。

※前田本の逸する範囲（中巻及びユメミ篇）は黒川本を用いた。

※通し番号（出現順）・見出し語・声点（ない場合は「-」でこれを示す）・注文（／は改行を示す、仮名音注は声点の清濁を反映した）・篇・所在の順に示した。

※見出し語・注文は、原則として通行字体で示したが、通行字体との差異が一定以上認められる字を近似の旧字体で示した場合がある。また、通行字体を（ ）内に補足した場合がある。誤字等は原則として原文通りに示し、（ ）内に正しいと思われる字体を補う等した。

- 1 引攝(撰)(平去濁) 佛法部/インゼウ(イ前田上12ウ)
 2 引導(平平濁) 同/インダウ(イ前田上12ウ)
 3 因縁(去上) 内典分/インエン/又人倫部(イ前田上12ウ)
 4 因果(去平濁) 同/イングワ(イ前田上12ウ)
 5 六通(入去) 佛法部/ロクツウ(ロ前田上19オ)
 6 論議(平平濁) 僧侶分/ロンギ(ロ前田上19オ)
 7 論辭(匠)(平去濁) 同/ロンジヤウ(ロ前田上19オ)
 8 八講(入平) 佛法部/ハツカウ(ハ前田上31ウ)
 9 八教(入平) ハツケウ/釋教分(ハ前田上31ウ)
 10 白馬(入上濁) 寺名/ハクバ(ハ前田上31ウ)
 11 入礼(入平) 佛法部/ニフライ/法會分(ニ前田上40オ)
 12 忍辱(平入軽) シノヒハツ/ニンニク/僧侶分/又慈悲分(ニ前田上40オ)
 13 入滅(ー) ニウメツ/僧死也(ニ前田上40オ)
 14 入室(入入) 同 ニツシツ/又芝名(ニ前田上40オ)
 15 柔和(去上) 同/ニウワ(ニ前田上40オ)
 16 柔軟(去平) ニウナン/同(ニ前田上40オ)
 17 法文(入去) 佛法部/ホウモン/内典分(ホ前田上47オ)
 18 梵字(平濁平濁) 同/ボンジ(ホ前田上47オ)
 19 梵語(平濁平濁) 同/ボンゴ(ホ前田上47オ)
 20 翻譯(去入) 同/ホンヤク(ホ前田上47オ)
 21 法相(入平) 同/ホフサウ(ホ前田上47オ)
 22 法華(入上) 寺家部/ホフクエ(ホ前田上47オ)
 23 寶幢(平去濁) 同/ホウドウ(ホ前田上47オ)
 24 寶蓋(平去) 同/ホウカイ(ホ前田上47オ)
 25 法會(入平) 一分/ホフエ(ホ前田上47オ)
 26 法用(入平) 同/ホウヨウ(ホ前田上47オ)
 27 硯(飛) 露(入平) 僧侶分/ホッロ(ホ前田上47オ)
 28 梵行(平濁平濁) 同/ボンギヤウ(ホ前田上47ウ)
 29 菩提(去濁上濁) 同/ボダイ(ホ前田上47ウ)
 30 燈明(去上) 佛法部/トウミヤウ(ト前田上62オ)
 31 讀經(入上) 僧侶分/トクキヤウ(ト前田上62オ)
 32 斗藪(上上) 同/トウソウ(ト前田上62オ)
 33 度祿(平上) 同/トロン(ト前田上62オ)
 34 登壇(平平濁) 同/トウダン(ト前田上62オ)
 35 長講(平平濁) 佛法部/チャウガウ(チ前田上69オ)
 36 鎮護(平平濁) チンゴ(チ前田上69オ)
 37 知識(去入) チシキ/同(チ前田上69オ)
 38 頂戴(平平) 同/チャウタイ(チ前田上69オ)
 39 長行(去濁上濁) 内典分/チャウガウ(チ前田上69オ)
 40 中門(去上) 寺家分/チュモン(チ前田上69オ)

- 41 住持 (平濁上濁) 同/ヂウヂ (チ前田上 69オ)
 42 聴衆 (平平濁) 法會分/チャウジウ (チ前田上 69オ)
 43 聴聞 (平去) チャウモン (チ前田上 69オ)
 44 定者 (平濁平濁) 同/ヂヤウジヤ (チ前田上 69オ)
 45 除帳 (去濁平濁) 僧侶分/ヂヨヂヤウ (チ前田上 69オ)
 46 持齋 (齋) (去濁上) チサイ (チ前田上 69オ)
 47 利他 (平上) 佛法部/リタ (リ前田上 74ウ)
 48 両界 (平平濁) リヤウガイ (リ前田上 74ウ)
 49 靈驗 (去平濁) 同/リヤウゲム (リ前田上 74ウ)
 50 堅義 (平平濁) 法會分/リウギ (リ前田上 74ウ)
 51 利養 (平平) 僧侶分/リヤウ (リ前田上 74ウ)
 52 留難 (去平) 佛法部/ルナン/僧侶分 (ル前田上 79ウ)
 53 香花 (去上濁) 佛法部/カウグワ (カ前田上 107オ)
 54 加持 (去上濁) カヂ (カ前田上 107オ)
 55 加護 (去平濁) カゴ (カ前田上 107オ)
 56 降伏 (去濁入濁) 同/ガウブク/又醫方分 (カ前田上 107オ)
 57 渴仰 (入平濁) 同/カツガウ/帰依—— (カ前田上 107オ)
 58 講堂 (平上濁) 寺家分/カウダウ (カ前田上 107オ)
 59 鴈 (雁) 塔 (去濁入) 同/ガンタウ (カ前田上 107オ)
 60 伽藍 (去濁上) 同/ガラム (カ前田上 107オ)
 61 講説 (平入濁) 法會分/カウゼツ (カ前田上 107オ)
 62 講筵 (平平) 同/カウエム (カ前田上 107オ)
 63 講經 (平去濁) 同/カウギヤウ (カ前田上 107オ)
 64 講演 (平平) 同/カウエン (カ前田上 107オ)
 65 講師 (平上濁) カウジ (カ前田上 107オ)
 66 合詔 (殺) (入入) カフサツ/云阿弥陀也 (カ前田上 107オ)
 67 加茶 (去上濁) 同/カダ (カ前田上 107オ)
 68 合黨 (入上) 僧侶分/カフタウ (カ前田上 107オ)
 69 戒條 (平平) 同/カイテウ (カ前田上 107オ)
 70 羯磨 (入平) 同/カツマ (カ前田上 107オ)
 71 大門 (——) 佛法部/タイモン/寺家分 (タ黒川中 6ウ)
 72 導師 (——) 法會分/タウシ (タ黒川中 6ウ)
 73 堂童子 (——) 同/タウトウシ (タ黒川中 6ウ)
 74 道心 (——) 僧侶分/タウシム (タ黒川中 6ウ)
 75 壇 (檀) 越 (——) 同/タンヨツ (タ黒川中 6ウ)
 76 靈驗 (——) 佛法部/レイケン (レ黒川中 14ウ)
 77 練習 (——) 同/レンシウ (レ黒川中 14ウ)
 78 練行 (——) 僧侶分/レンキヤウ (レ黒川中 14ウ)
 79 尊重 (——) 佛法部/ソントウ (ソ黒川中 18ウ)
 80 僧侶 (——) ——分/ソウリヨ (ソ黒川中 18ウ)

- 81 僧家 (ー) 同/ソウケ (ソ黒川中 18ウ)
 82 僧房 (ー) 同/ソウハウ (ソ黒川中 18ウ)
 83 追福 (ー) 佛法部/ツイフク (ツ黒川中 28オ)
 84 頭陀 (陀) (ー) 僧侶分/ツウタ (ツ黒川中 28オ)
 85 念誦 (ー) 佛法部/ネンシユ/僧侶分 (ネ黒川中 31ウ)
 86 念佛 (ー) (ネ黒川中 31ウ)
 87 南無 (ー) ワレヲタスケタマヘ/佛法部/ナムモ (ナ黒川中 37オ)
 88 内典 (ー) ー分/ナイテン (ナ黒川中 37オ)
 89 禮拜 (ー) 佛法部/ライハイ (ラ黒川中 41オ)
 90 礼足 (ー) 同/ライソク (ラ黒川中 41オ)
 91 礼盤 (ー) 寺家分/ライハン (ラ黒川中 41オ)
 92 烏瑟 (ー) 佛法部/ウシユツ (ウ黒川中 53ウ)
 93 有驗 (ー) 同/僧侶分 (ウ黒川中 53ウ)
 94 圍繞 (ー) 遶イ本/佛法部/キネウ (キ黒川中 57オ)
 95 威力 (ー) 同/又尊者部 (キ黒川中 57オ)
 96 威光 (ー) 同 (キ黒川中 57オ)
 97 擁護 (ー) 佛法部/オウゴ (オ黒川中 69ウ)
 98 灌佛 (ー) 佛法部/クワンフツ (ク黒川中 79オ)
 99 灌頂 (ー) クワンチ (複点) ヤウ/同 (ク黒川中 79オ)
 100 供養 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 101 恭敬 (ー) キヤ〜シ/クキヤウ/同 (ク黒川中 79オ)
 102 歸依 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 103 華嚴 (ー) 内典分 (ク黒川中 79オ)
 104 俱舍 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 105 苦修 (ー) ネンコロ/僧侶分/クシユ (ク黒川中 79オ)
 106 苦行 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 107 久住 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 108 功德 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 109 觀空 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 110 悔過 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 111 化他 (ー) 同 (ク黒川中 79オ)
 112 摩頂 (ー) 佛法部 (マ黒川中 94ウ)
 113 結縁 (ー) 佛法部 (ケ黒川中 98ウ)
 114 結衆 (ー) (ケ黒川中 98ウ)
 115 潔齋 (齋) (ー) イツクシクヨシ/ケツサイ (ケ黒川中 98ウ)
 116 顕密 (ー) 同 (ケ黒川中 98ウ)
 117 教法 (ー) 同 (ケ黒川中 98ウ)
 118 顕教 (ー) 内典分 (ケ黒川中 98ウ)
 119 偈頌 (ー) 同 (ケ黒川中 98ウ)
 120 結願 (ー) 法會分 (ケ黒川中 98ウ)

- 121 驗者 (ー) 僧侶分 (ケ黒川中 98ウ)
 122 教化 (ー) 同 (ケ黒川中 98ウ)
 123 教授 (ー) フシ、サクク (ケ黒川中 98ウ)
 124 加行 (ー) 同/ケキヤウ (ケ黒川中 98ウ)
 125 佛法 (ー) ー部 (フ黒川中 106オ)
 126 佛名 (ー) 同 (フ黒川中 106オ)
 127 布薩 (ー) 同 (フ黒川中 106オ)
 128 諷誦 (ー) 同 (フ黒川中 106オ)
 129 覺鐘 (ー) 寺家分/フシヨウ (フ黒川中 106オ)
 130 舞臺 (ー) 同 (フ黒川中 106オ)
 131 五戒 (平平) 仏法部 (コ前田下 10ウ)
 132 五時 (ー) 釈教/名 (コ前田下 10ウ)
 133 金乗 (去上) 佛名/コムシヨウ (コ前田下 10ウ)
 134 金堂 (去上) 寺家分 (コ前田下 10ウ)
 135 金鼓 (鼓) (去平) 同 (コ前田下 10ウ)
 136 許可 (平平) コカ (コ前田下 10ウ)
 137 護摩 (平濁上) コマ (コ前田下 10ウ)
 138 御齋 (齋) 會 (ー) 法會分 (コ前田下 10ウ)
 139 摘花 (入平) 佛法部/テキクワ (テ前田下 22オ)
 140 天台 (去上) 内典 (テ前田下 22オ)
 141 安居 (去上) 佛寶部/アンコ/僧侶分 (ア前田下 39オ)
 142 三昧 (去平) 佛法部/ (以下擦消) サ■■■■ (サ前田下 51オ)
 143 三歸 (去上) 同/仏法僧也 (サ前田下 51オ)
 144 綵色 (平入) イロトル/同/サイシキ (サ前田下 51オ)
 145 讚嘆 (平平濁) サンダン (サ前田下 51オ)
 146 相應 (去上) 同/サウヲウ (サ前田下 51オ)
 147 三明 (去-) (注記擦消) (サ前田下 51オ)
 148 三論 (去平) 内典分/ (以下擦消) サ■■■■ (サ前田下 51オ)
 149 三經 (綱) (去上) 寺家分 (サ前田下 51オ)
 150 彩幡 (平去) 同/サイハン (サ前田下 51オ)
 151 最勝 (去平) 法會分/ (以下擦消) サ■■■■ (サ前田下 51オ)
 152 三礼 (平平) 同/ (以下擦消) サ■■■■ (サ前田下 51オ)
 153 散花 (平上濁) (以下擦消) サ■■ゲ (サ前田下 51オ)
 154 坐禪 (平去) 僧侶分 (サ前田下 51オ)
 155 栴 (桑) 門 (ー) サウモン/僧名 (サ前田下 51オ)
 156 齋 (齋) 食 (平入) 同/サイシキ/時 (サ前田下 51オ)
 157 齋 (齋) 戒 (平去) サイカイ (サ前田下 51オ)
 158 懺慙 (懺悔) (平平) 同/サンクヰ/又下字悔 (サ前田下 51オ)
 159 懺愧 (慙愧) (去濁平濁) ハチハツ/同/上一天/下一人/ザムグキ (サ前田下 51オ)
 160 讚佛 (平入) 同/ (以下擦消) サンフシ (サ前田下 51オ)

- 161 祈念(去平) 佛法部/キネム(キ前田下 61オ)
 162 祈願(去平) 同/キクワン(キ前田下 61オ)
 163 義解(解)(平平) 内典分(キ前田下 61オ)
 164 經論(去平) 同(キ前田下 61オ)
 165 經藏(一) 寺家(キ前田下 61オ)
 166 行香(去上) 法會分(キ前田下 61オ)
 167 行道(去平) 同/キヤウタウ(キ前田下 61オ)
 168 行者(平平) 僧侶分/キヤウシヤ(キ前田下 61オ)
 169 経行(去上濁) 同(キ前田下 61オ)
 170 維摩(一) 佛法部/法會分(ユ黒川下 56ウ)
 171 面向(一) 佛法部(メ黒川下 60オ)
 172 蜜(密) 教(一) 佛法部/内典分(ミ黒川下 65ウ)
 173 冥加(一) 僧侶分/ミヤウカ(ミ黒川下 65ウ)
 174 弥天(一) ミテン/僧名(ミ黒川下 65ウ)
 175 名聞(一) 同/ミヤウモン(ミ黒川下 65ウ)
 176 冥譚(一) ミヤウケン(ミ黒川下 65ウ)
 177 修法(一) 仏法部/シユホウ(シ前田下 79ウ)
 178 石塔(一) (シ前田下 79ウ)
 179 誦經(一) (シ前田下 79ウ)
 180 守護(一) (シ前田下 79ウ)
 181 四弘(一) (シ前田下 79ウ)
 182 自利(一) (シ前田下 79ウ)
 183 荘(荘) 巖(去上濁) シヤウゴム(シ前田下 79ウ)
 184 周廻(匝)(去去) シユサウ(シ前田下 79ウ)
 185 勝利(一) (シ前田下 79ウ)
 186 信施(一) シンセ(シ前田下 79ウ)
 187 受記(一) 同(シ前田下 79ウ)
 188 章疏(一) 内典分(シ前田下 79ウ)
 189 聖教(平平濁) シヤウゲウ(シ前田下 79ウ)
 190 真言(一) シンゴン(シ前田下 79ウ)
 191 止観(一) シクワン(シ前田下 79ウ)
 192 悉曇(入去) シツタム(シ前田下 79ウ)
 193 成實(一) 同(シ前田下 79ウ)
 194 寺家(一) 一分(シ前田下 79ウ)
 195 鐘樓(一) 同(シ前田下 80オ)
 196 鐘堂(一) (シ前田下 80オ)
 197 常行(一) (シ前田下 80オ)
 198 石磬(一) (シ前田下 80オ)
 199 借住(一) 同(シ前田下 80オ)
 200 咒(呪) 願(一) 法會分(シ前田下 80オ)

- 201 受持 (ー) シユチ／經名 (シ前田下 80 才)
- 202 進善 (去平) シンセン／幡名也 (シ前田下 80 才)
- 203 釋教 (ー) 五時八教 (シ前田下 80 才)
- 204 淨行 (ー) 僧侶分 (シ前田下 80 才)
- 205 修驗 (ー) シユケム (シ前田下 80 才)
- 206 修學 (ー) シユカク (シ前田下 80 才)
- 207 修行 (ー) シユキヤウ (シ前田下 80 才)
- 208 受戒 (ー) シユカイ (シ前田下 80 才)
- 209 師檀 (ー) (シ前田下 80 才)
- 210 師辭 (匠) (ー) シ、ヤウ (シ前田下 80 才)
- 211 自恣 (ー) (シ前田下 80 才)
- 212 障礙 (平平) シヤウケ (シ前田下 80 才)
- 213 瀉 (原字は卍+寫) 瓶 (去上) シヤヒヤウ (シ前田下 80 才)
- 214 釋經 (ー) (シ前田下 80 才)
- 215 衆断 (ー) 同 (シ前田下 80 才)
- 216 廻向 (去平) 仏法部／エカウ／法會分 (エ前田下 89 才)
- 217 譬喩 (平平) 仏法部／ヒユ／内典分 (ヒ前田下 97 才)
- 218 白毫 (入濁去濁) ビヤクガウ (ヒ前田下 97 才)
- 219 非時 (去上) 僧侶分 (ヒ前田下 97 才)
- 220 誓願 (去平) 仏法部リ (セ前田下 110 才)
- 221 刹柱 (入去) 寺家 (セ前田下 110 才)
- 222 説經 (入上) 僧侶分／セツキヤウ (セ前田下 110 才)
- 223 説法 (ー) 同／セツホウ (セ前田下 110 才)
- 224 禪房 (去上) 同 (セ前田下 110 才)
- 225 禪室 (去入) (セ前田下 110 才)
- 226 禪定 (去平) 同 (セ前田下 110 才)

【表一】篇別項目数

イ	4	キ	3
ロ	3	ノ	0
ハ	3	オ	1
ニ	6	ク	14
ホ	13	ヤ	0
ヘ	0	マ	1
ト	5	ケ	12
チ	12	フ	6
リ	5	コ	8
ヌ	0	エ	0
ル	1	テ	2
ヲ	0	ア	1
ワ	0	サ	19
カ	18	キ	9
ヨ	0	ユ	1
タ	5	メ	5
レ	3	ミ	5
ソ	4	シ	39
ツ	2	エ	1
ネ	2	ヒ	3
ナ	2	モ	0
ラ	3	セ	7
ム	0	ス	0
ウ	2	計	226

※【表一】の通り、全二二六項目である。仏法部の排列の中に疊字部神社部語彙等別部の語が紛れている場合はこれを排除した。

※「73 堂童子」「138 御齋(齋)會」は三漢字語であり、本来疊字部音読語末の「長疊字」に排されるべき語とも考えられるが、今回は表に含めた。

※なお、仏法部は疊字部前半の音読語を分類したものであり、この表にある全ての語が

音読語となっている。

【表二】「分」「名」別項目数

項目数		
$A+B+C+D+E-B-E = A+C+D = 226$		
A	仏法部(単独)	68
B	仏法部+分 (内典7、寺家1、法会2、僧侶5)	15
計		83
C	積教分	1
	内典分	25
	寺家分	27
	法会分	25
	僧侶分	75
計		153
D	寺名	1
	積教名	1
	仏名	1
	經名	1
	幡名	1
E	芝名(僧侶分)	1
	僧名(僧侶分)	2
計		8

※【表二】を作成するに当たり、本来は「部」「分」等の表記が注文中に存しない項目についても、前後の項目注記や内容、「同」表記より推察し、二、三、六項目全てについてこれらを補い、いずれかの分類を施した(次表)。

1	仏法部	39	内典分	77	仏法部	115	仏法部	153	法会分	191	内典分			
2	仏法部	40	寺家分	78	僧侶分	118	仏法部	154	僧侶分	192	内典分			
3	内典分	41	寺家分	79	仏法部	117	仏法部	155	僧侶分	193	内典分			
4	内典分	42	法会分	80	僧侶分	118	内典分	156	僧侶分	194	寺家分			
5	仏法部	43	法会分	81	僧侶分	119	内典分	157	僧侶分	195	寺家分			
6	僧侶分	44	法会分	82	僧侶分	120	法会分	158	僧侶分	196	寺家分			
7	僧侶分	45	僧侶分	83	仏法部	121	僧侶分	159	僧侶分	197	寺家分			
8	仏法部	46	僧侶分	84	僧侶分	122	僧侶分	160	僧侶分	198	寺家分			
9	積教分	47	仏法部	85	仏法部	123	僧侶分	161	仏法部	199	寺家分			
10	僧侶分	48	仏法部	86	仏法部	124	僧侶分	162	仏法部	200	法会分			
11	僧侶分	49	仏法部	87	仏法部	125	仏法部	163	内典分	201	法会分			
12	僧侶分	50	法会分	88	内典分	126	仏法部	164	内典分	202	法会分			
13	僧侶分	51	僧侶分	89	仏法部	127	仏法部	165	寺家分	203	法会分			
14	僧侶分	52	仏法部	僧侶分	90	仏法部	128	仏法部	166	法会分	204	僧侶分		
15	僧侶分	53	仏法部	91	寺家分	129	寺家分	167	法会分	205	僧侶分			
16	僧侶分	54	仏法部	92	仏法部	130	寺家分	168	僧侶分	206	僧侶分			
17	仏法部	内典分	55	仏法部	93	仏法部	僧侶分	131	仏法部	169	法会分			
18	仏法部	内典分	56	仏法部	94	仏法部	132	170	仏法部	法会分	208	僧侶分		
19	仏法部	内典分	57	仏法部	95	仏法部	133	171	仏法部	209	僧侶分			
20	仏法部	内典分	58	寺家分	96	仏法部	134	寺家分	172	仏法部	内典分	210	僧侶分	
21	仏法部	内典分	59	寺家分	97	仏法部	135	寺家分	173	僧侶分	211	僧侶分		
22	寺家分	60	寺家分	98	仏法部	136	寺家分	174	僧侶分	212	僧侶分			
23	寺家分	61	法会分	99	仏法部	137	寺家分	175	僧侶分	213	僧侶分			
24	寺家分	62	法会分	100	仏法部	138	法会分	176	僧侶分	214	僧侶分			
25	法会分	83	法会分	101	仏法部	139	仏法部	177	仏法部	215	僧侶分			
26	法会分	84	法会分	102	仏法部	140	内典分	178	仏法部	216	仏法部	法会分		
27	僧侶分	85	法会分	103	内典分	141	仏法部	僧侶分	179	仏法部	内典分	217	仏法部	内典分
28	僧侶分	86	法会分	104	内典分	142	仏法部	180	仏法部	218	仏法部	219	僧侶分	
29	僧侶分	87	法会分	105	僧侶分	143	仏法部	181	仏法部	219	僧侶分			
30	仏法部	88	僧侶分	106	僧侶分	144	仏法部	182	仏法部	220	仏法部			
31	僧侶分	89	僧侶分	107	僧侶分	145	仏法部	183	仏法部	221	寺家分			
32	僧侶分	90	僧侶分	108	僧侶分	146	仏法部	184	仏法部	222	僧侶分			
33	僧侶分	71	仏法部	寺家分	109	僧侶分	147	仏法部	185	仏法部	223	僧侶分		
34	僧侶分	72	法会分	110	僧侶分	148	内典分	186	仏法部	224	僧侶分			
35	仏法部	73	法会分	111	僧侶分	149	寺家分	187	仏法部	225	僧侶分			
36	仏法部	74	僧侶分	112	仏法部	150	寺家分	188	内典分	226	僧侶分			
37	仏法部	75	僧侶分	113	仏法部	151	法会分	189	内典分					
38	仏法部	76	仏法部	114	仏法部	152	法会分	190	内典分					

※注文中に「又人倫部」(人倫部)・「又慈悲分」(人情部)・「又醫方分」(醫方部)の誤りか。

「又尊者部」(尊者部)として、疊字部内の別の「部」「分」を補足注記する場合があるが、これらの名称は表に含めず、仏法部内の分類によってのみ示した。

※単に「仏法部」とあるものは、大部分が該当篇該当部の冒頭に位置し、広く仏教に係する語を表しているものと考えられるが、「217白毫」(仏の眉間にある白い毛)については、前後に内典分や僧侶分があるものの、語義から「分」を持たない仏法部に分類した。

※仏法部の分名に用いられた「釈教・内典・寺家・法会・僧侶」の語はいずれも仏法部に収録されている。また、峰岸氏(中田・峰岸一九七七・解説篇四三頁)の御指摘通り、分名はこの順に排列され、順序に乱れはなかった。

釋教 五時八教(疊字・シ前田下80オ)

内典 一分/ナイテン(疊字・ナ黒川中37オ)

寺家 一分(疊字・シ前田下79ウ)

法會 一分/ホフエ(疊字・ホ前田上47オ)

僧侶 一分/ソウリヨ(疊字・ソ黒川中18ウ)

第二項 仏法部語彙の音注

本辞書の音注(声調、仮名音注、直音音注Ⅱ類音表記)については、既に多くの研究が為されている(参考文献参照)。その中でも特に仏法部語彙については、高松氏(一九八〇a)に御指摘がある(一部後述)。高松氏は色葉字類抄の呉音を我が国の呉音声調史上に位置付け、呉音声調資料としての色葉字類抄の性格を浮き彫りにする、との目的で、前田本の声点を調査対象にされたのであるが、それに際し中巻を含む全巻の仮名音注を原則として調査の埒外に置かれたため、ここに改めて調査の結果を報告する次第である。本項の目的は、語彙研究・字類抄研究の立場から仏法部の漢字音を分析するものであるため、自ずと分析範囲に差が生ずるものと理解されたい。

また、字類抄全体の声調体系を明らかにする課題とは別に、仏法部語彙の音注が如何なる様相のものであるかを分析することは、仏法部を始めとする疊字部語彙の音注について、想定される当時の利用者にとどの程度の厳密さが求められていたか―延いては、如何なる目的で字類抄が編纂されたか、という点を解明する手がかりとなるものであると筆者は考える。

■音注概観

仏法部語彙に付された音注の詳細は前項に掲げた通りであるが、「声点の有無」「仮名音注の有無」「声点型別項目数」を見ると、それぞれ【表三】【表四】【表五】のようである。すなわち、仏法部語彙(前田本)の約四分の三の語が差声されており【表三】(下表)、仏法部語彙の約三分の二の語に仮名音注が付されている【表四】(下表)ことが分かる。

※声点型は、上上型(32斗敷)、去去型(8斗周通(匝))が各一例見える他は、呉音の特徴の原則から外れていない(後者は去入の誤点とも考えられるが、去去型として表

上位字別	項目数	声点型		項目数	下位字別	
平●=48	13	平平	平平	27	●平=56	
	10	平平濁				
	4	平濁平濁				
	2	平上	平上	7		
	3	平上濁				
	1	平濁上				
	1	平濁上濁	平去	9		
	5	平去				
	4	平去濁				
	4	平入	平入	5		
1	平入濁					
上●=1	1	上上	上上	1	●上=37	
去●=50	14	去平	去平	19		
	3	去平濁				
	2	去濁平濁				
	15	去上	去上	24		
	5	去上濁				
	2	去濁上				
	2	去濁上濁	去去	1		
	1	去去				
	3	去入				去入
	2	去濁入				
1	去-	去-	1	不明=1		
入●=22	9	入平	入平		10	
	1	入平濁				
	4	入上	入上		5	
	1	入上濁				
	4	入去	入去		5	
	1	入濁去濁				
2	入入	入入	2			
なし=105	105	なし			105	なし=105
226	226	計			226	226

【表五】声点型別項目数

有無\字目	1	2	3
有(全体)	145語	145語	0語
無(全体)	76語	76語	1語
摺消	5語	5語	0語
計	226語	226語	1語
仮名音注の有無			%
有	145/226語	64.16	
無	76/226語	33.63	
摺消	5/226語	2.212	

【表四】仮名音注の有無

※字類抄中にしばしば見られる、語の一部にのみ読み方(音読み)が示されるような例はなかった。
 ※上字(一字目)に関して、音注がない場合でも所属篇から読みを推定出来る場合があるため、分析の対象とした。
 ※仮名音注を有しない語は中巻(黒川本)及び下巻に偏っており、上巻所収語は全てこれを有する。

声点の有無			項目数
前田本	有(全体)	120語	159語
	有(部分)	1語(147三明)	
	無	38語	
黒川本	有	0語	67語
無	67語		
計	226語		
声点の有無			%
前田本	有	121/159語	76.101
	無	38/159語	23.899

【表三】声点の有無

※黒川本には差声されておらず、声調の分析には前田本の一二語のみが使用可能である。
 ※字類抄中にしばしば見られる二字以上の漢字語の一部にのみ差声される例は、仏法部語彙にはほぼ見られなかった。「147三明(去-)」は、部分差声の唯一の例である。

に計上した「注二」。

■字類抄仏法部音注と呉音体系との比較

次に、仏法部語彙のうち、呉音体系と異なる声調・仮名音注を持つ例「注三」を【表六】【表七】に挙げ、続いて各項目についての分析を行う。また各表に併せて、参考までに三卷本字類抄内の同字への音注を掲げた。

※声調・仮名音注の比較には、呉音資料として『法華経单字』（『单字』）、『法華経音訓』（『音訓』）を主に、『安田八幡宮藏大般若波羅蜜多经』（『大般若经』）、『類聚名義抄（観智院本・凶書寮本）』和音、『五十音引き漢和辞典』（冲森卓也編、三省堂、二〇〇四）を補助的に使用した。また漢音資料として『宋本広韻』『長承本蒙求』を使用した。

※呉音声調の同定に関しては、原則として、韻書との不一致ではなく、『单字』『音訓』（両書に掲出字のない場合は『大般若经』）との一致を以て行った「注四」。

※呉音声調を上声・去声対平声の対立と考え、上声・去声間の揺れは無視し、一致項目として処理した。また、「期待される呉音声調」で前項（二字目）が上声である場合は、去声として示した。

【表六】字類抄（单字）の声調が呉音の体系と異なる例

下字	上字										下字	上字		下字		参考				
	220 刹住 (へせー)	157 寶戒 サイカイ	139 蓮花 チキクワ	32 斗羅 トウソウ	10 白馬 ハクバ	6 錦輝 ロンギ	212 涅槃 シヤヒヤウ	201 蓮華 シンセン	159 摩伽 サムグキ	152 三礼 サニリ		35 持護 チンゴ	35 長護 チャウガウ	34 曼理 トウダン	字類抄 期待される 呉音声調		広韻	字類抄 期待される 呉音声調	広韻	漢音二一致 (真韻)
入	平	入	上	入	平	去	去	去	平	平	平	平	去	平	平	上	去	○	○	漢サツチウ
(へ入)	(去・平)	(へ入)	(去)	(へ入)	(平・去)	平・	平	平	去	平	平	平	去	上	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢チヤククエ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢チヤククエ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平	入	上	上	平	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
(へ入)	(平)	(へ入)	(上)	(へ入)	上	上	平	平	平	平	平	平	去	平	平	上	○	○	漢セイカイ	
入	平																			

【参考】 字類抄内・同字の声調 ※関連部分のみを示す。

【登】【平】…登華殿(平平・/地儀)、登曉(平入/豊字)、登時(平平濁/豊字)、登霞(平平濁/豊字)、登用(平去/豊字)、登省(平上濁/豊字)、登天(平平濁/豊字)、【去】…登天樂(去上・/人事)、登臨(去・/豊字)

壇 ×

【長】【平】…長慶子(平去濁平/人事)、長秋宮(平平平/豊字)、長生(平上/豊字)、長髮(平入/豊字)、長樂(平入/豊字)、長短(平・/豊字)、長大息(平去入/豊字)、天長(平平/豊字)、長庚(平平/天象、徐長郷(平平平/植物)、長嘯車(平平・/雑物)、【上】…優長(平上/豊字)、長官(上平濁/官職)、長成(上平/豊字)、成長(平上/豊字)、【去】…長行(去濁上濁/豊字)、長案(去平/豊字)

【鎮】【平】…鎮子(平上/雑物)、鎮魂(平平濁/豊字)、鎮守(平平濁/豊字)

【三】【平】…三基塩(平平濁・/人事)、三鈷(平上濁/雑物)、【平軽】…三封(平軽平/動物)、三光(平軽平/豊字)、三友(平軽去/豊字)、【去】…三昧(去平/豊字)、三歸(去上/豊字)、三明(去・/豊字)、三論(去平/豊字)、三綱(去上/豊字)、三矢(去入/豊字)、三途(去上/豊字)

【懺】【平】…懺(右傍)サム(平/人事)、懺(サン)悔(平平/豊字)、【去濁】…懺(セムズ(去濁平軽上濁) (去濁/人事)

【進】【平】…進止(平上濁/豊字)、進発(平去/豊字)、【平濁】…弁進(平濁平濁/豊字)、返進(平平濁/豊字)、昇進(平平濁/豊字)、進退(去平濁/豊字)、【去】…進宿徳(去上・/高麗樂/人事)

瀟 ×

【議】【平】…権議(去平/豊字)、朝議(平平/豊字)、議定(平平/豊字)、僉議(平平/豊字)、【平濁】…議讞(平濁上濁/豊字)、非參議(去平平濁/豊字)、【上濁】…和議(去上濁/豊字)

【馬】【上】…牛馬走(平上上/豊字)、俊馬(去上/豊字)、【上濁】…遊馬(ハ)(平上濁/豊字)、馬(ハ)上(上濁去/豊字)、馬(ハ)后(上濁去/豊字)、銅馬(ハ)(平上濁/豊字)、竹馬(ハ)(入上濁/豊字)、兩馬(ハ)(上上濁/豊字)、馬(ハ)陸(上濁入/動物)、四馬(ハ)車(去上濁・/雑物)、馬(ハ)上(上濁去/雑物)

藪 ×

【花】【平】…花(クワ) (平/植物)、玉樹後庭花(入平去平平/黄鐘調/人事)、【上】…柳花(クワ)苑(上上平/人事)、【上濁】…散花(平上濁/豊字)、【去】…藤花(クワ) (去去/豊字)

【華】【平】…登華(クワ)殿(平平・/地儀)、容華(クワ) (平平/豊字)、榮華(クワ) (平平/豊字)、仙華門(平平・/地儀)、春華門(平平・/地儀)、凝華(クワ) (舎(平濁平・/地儀)、西華門(平平/地儀)、【上】…詞華(平上/豊字)、法華(クエ) (入上/豊字)、【去】…才華(平去/豊字)

【戒】【平】…戒條(平平/豊字)、五戒(平平/豊字)

【柱】【平】…柱礎(平上/豊字)、【上】…柱(上/地儀)、鼻柱(一上/人体)、帆柱(一上/雑物)、【去】…白柱(入去/人事)、麻柱(平濁去/豊字)、楮柱(平去/豊字)

クウ(疊字)」「周白シウハク(人事)」「暈字)」「潔白ケツハク(疊字)」「清淨
潔白セイ、ケツハク(疊字)」「寸白スハク(人体)」「明白メイハク(疊字)」「
【ヒヤク】「表白ヘウヒヤク(疊字)」「啓白ケイヒヤク(疊字)」「白檀ヒヤクタン(植
物)」「白附子ヒヤクフシ(植物)」「白丁ヒヤクチャウ(人倫)」「白蓋ヒヤクカ
イ(雑物)」「白鐵ヒヤクラウ(雑物)」「白青ヒヤクシヤウ俗(光彩)」「白毫ヒ
ヤクカウ(疊字)」

【馬】「遊馬(平上濁)イウハ(疊字)」「馬上(上濁去)ハシヤウ(疊字)」「馬后(上
濁去)ハコウ(疊字)」「銅馬(平上濁)トウハ(疊字)」「竹馬(入上濁)チクハ
(疊字)」「兩馬(上上濁)リヤウハ(疊字)」「馬陸(上濁入)ハリク(動物)」「四
馬(去上濁)車シハシヤ(雑物)」「馬上(上濁去)ハシヤウ(雑物)」
【メ】「主馬スメ(官職)」「馬道メタウ(地儀)」「馬腦メナウ俗(雑物)」

【摘】×

【花】「藤花(去去)トウクワ(疊字)」「柳花苑(上上平)リウクワエン(人事)」「花
梨木クワリホク(雑物)」

【クエ】「金錢(右傍)キムセム(平平)花コムセンクエ(下上上上上)俗(植
物)」

【華】「クワ】「登華(平平)殿トウクワ(地儀)」「容華(平平)ヨウクワ(疊字)」「楚華
ソクツ(ワ)(疊字)」「華即クワマン/俗(雑物)」「華麗クワレイ(疊字)」「華
族クワソク(疊字)」「華樽クワソン(疊字)」「華輦クワレン(疊字)」「華他
クワタ(疊字)」「榮華(平平)エイクワ(疊字)」「凝華(右傍)キョウクワ(平
濁平)舍(地儀)」

【クエ】「法華寺家部/ホフクエ(疊字)」

【斗】「ト/トウ】「北斗ホクトウ(上上上上)ノホクト(天象)」「斗(上)トウ/ト俗(員
数)」

【ト】「北斗(入上)ホクト(疊字)」

【トウ】「刀斗(平上)テウトウ(雑物)」「墨斗(入濁上)ホクトウ(雑物)」

【堅】「シウ】「内堅ナイシウ(官職)」

【リツ】「堅者リツシヤ(官職)」

【靈】「レイ】「靈レイ(人倫)」「靈異レイイ(疊字)」「靈童レイトウ(疊字)」「靈底レ
イテイ(疊字)」「含靈(平去)カムレイ(疊字)」

【リヤウ】「靈驗(去平濁)佛法部/リヤウケム(疊字)」

【頭】「チウ】「塔頭タツチウ(諸寺)」

【ツ】「智頭チツ(国郡)」「巴頭ハツ(雑物)」「頭風ツツ俗(人体)」「牛頭コツ(雑
物)」「氷頭ヒツ俗(動物)」「益頭マシツ(国郡)」

【ト】「頭巾(一平)トキム(雑物)」「頭巾(平平)トキン(疊字)」

【トウ】「路頭(上平)ロトウ(疊字)」「拔頭(上濁平)ハトウ」「晚頭(上濁平濁)
ハムトウ(疊字)」「蓬頭(平去濁)ホウトウ(疊字)」「頭腦(平上濁)トウタウ
ノトウナウ(飲食)」「頭トウ(官職)」「陣頭(去濁)チントウ(疊字)」「龍
頭(平平濁)リョウトウ(雑物)」「瀧頭(上平)リョウトウ(疊字)」「叩頭虫(上
平)コウトウ(動物)」「頭(平)トウ(人体)」「羈頭カウトウ(飲食)」「羈

頭(去平)カウトウ(疊字)」「龍頭レウトウ(疊字)」「寮頭レウトウ(官職)」「鴨頭草アフトウー(植物・光彩)」「絡頭ートウ(雑物)」「烏頭ヲキトウ(マ)」「動物)」「換頭クワントウ(疊字)」「纏頭(平平濁) テントウ(疊字)」「座頭サトウ(官職)」「雀頭(入平)シヤクトウ(疊字)」

【加】「カ」「加持(去上濁)カチ(疊字)」「加護(去平濁)カコ(疊字)」「加茶(去上濁)カタ(疊字)」「加階(去上)カ、イ(疊字)」「加汲(去入)カキフ(疊字)」「加冠(去平)カクワン(疊字)」「加賀カ、(国郡)」「加陽カヤ(姓氏)」「冥加ミヤウカ(疊字)」

【饑】「サム」「饑(平)(右傍)サム(人事)」

【ザム】「饑(去濁)ザムズ(去濁平軽(上か) 上濁)(人事)」

【セン】「無饑ムセン(疊字)」

【行】「カウ」「歩行(去平)ホカウ(疊字)」「陸行(入平)リクカウ(疊字)」「行(平)カウ(人事)」「行障(平平)カウシヤウ(雑物)」「鴈行(去濁平)カンカウ(疊字)」「行酒(平上)カウシユ(疊字)」「行旅(平平)カウリヨ(疊字)」「行李(平上)カウリ(疊字)」「行歩(平上)カウホ(疊字)」「行蔵(平平)カウサウ(疊字)」「行カウ(辞字)」「行騰カウトウ(雑物)」「膝行シツカウ(疊字)」「操行(去平)サウカウ(疊字)」「微行(平平濁)ヒカウ(疊字)」

【キヤウ】「梵行(平濁平濁)ホンキヤウ(疊字)」「獨行(入平)トクキヤウ(疊字)」「同行(去濁平濁)トウキヤウ(疊字)」「德行(入平濁)トクキヤウ(疊字)」「姪行(去平)カンキヤウ(疊字)」「練行レンキヤウ(疊字)」「濫行ランキヤク(ウ)(疊字)」「行キヤウ(人事)」「行香(去上)(キ篇疊字)」「行道(去平)キヤウタウ(疊字)」「行者(平平)キヤウシヤ(疊字)」「経行(去上濁)(キ篇疊字)」「行幸(平上)キヤウカウ(疊字)」「行住(キ篇疊字)」「行事キヤウシ(官職)」「修行者シユキヤウシヤ(人倫)」「修行シユキヤウ(疊字)」「施行(平平)シキヤウ(疊字)」「時行(去濁上濁)シキヤウ(疊字)」「自行化他シキヤウクエタ(疊字)」「執行シフキヤウ(官職)」「遵行(平濁平濁)スンキヤウ(疊字)」「遊行ユキヤウ(疊字)」「行啓キヤウケイ(疊字)」

【去】「才行(平去)(疊字)」

【煞】「セツ」「煞竹セツチク(疊字)」「煞害セツカイ(疊字)」「煞生(七篇疊字)」

【重】「チウ」「重々チウ、(重点)」「重代(平濁上濁)チウタイ(疊字)」「重怠(平去)チウタイ(疊字)」「重服(平濁入濁)チウフク(疊字)」「嚴重ケンテウ(疊字)」「鄭重(去平)テイチウ(疊字)」

【チヨウ】「八重(入平)ハッチヨウ(疊字)」「重陽(平平)チヨウヤウ(疊字)」「重職(去入濁)チヨウシヨク(疊字)」「珠重(平去)チンチヨウ(疊字)」「重疊(平入濁)チヨウテウ(疊字)」「重(平)チヨウ(辞字)」「貴重クチヨウ(疊字)」「秘重(平平)ヒチヨウ(疊字)」

【鐘】「シウ」「鐘樓シウロウ(地儀)」

【スウ】「鐘(平)スウ(雑物)」

【シヨウ】「林鐘(平平)リムシヨウ(疊字)」「籠鐘(平平)リヨウシヨウ(疊字)」「龍鐘リヨウシヨウ(疊字)」「鐘愛(平去)シヨウアイ(疊字)」

次に、【表六・七】の内容を、A～Gの七種類に分けてそれぞれ考える。

- A 除外①漢音／呉音の仮名音注の一音節長音化が見られる語
- B 除外②漢音・呉音のいずれとも一致しない要素を持つ語
- C 除外③音訳語
- D 漢音系に近い語
- E 声調に漢音系・呉音系が混在する語
- F 仮名音注に漢音形・呉音形が混在する語
- G 声調と仮名音注がずれる語

A 除外①漢音／呉音の仮名音注の一音節長音化が見られる語

32 斗藪(上上) 同(僧侶分)／トウソウ(卜前田上62オ)

84 頭陀(陀) (ー) 僧侶分／ツウタ(ツ黒川中28オ)

「斗藪」は前掲の通り、上字が上声(また上上型)の唯一の例である。これに関して、高松氏が以下のように述べておられる。

□本書の声点に依れば、前項に上声が立つことは皆無であり、また去去という曲調型は存在しないことになる。これは大きな特徴である。そして、これが、所謂呉音の本性とはなるのである。(中略) これは、決して、本書のみの奇異なる現象ではない。(中略) 本書の内典関係語は、よく、その伝統を墨守していることを示すと共に、また、当該期の実情を典型的に教えているものと結論付けられよう。(中略) 色葉字類抄の内典関係語には、右の中の、④上平、⑥上上型は未だ姿を見せていない。右の型の全ては、実は中世のものにおいて揃うのである。(中略) 繰返して纏めておけば、前節冒頭に示した系譜図で、呉音語の七型全てを具備する一つ前の段階に、本書はある。そして、去声から派生する上声の萌芽的なものも含んでいた。

(高松一九八〇a)

この中で、「仏法部語彙(内典関係語彙)中に上上型は皆無」との主張が散見されるが、より正確に記述するならば、「仏法部語彙中、声調が呉音系と目される語のうち上上型は皆無」なのである。「斗藪」は『仏教語大辞典』(以下、中村)に「抖擻」という。また斗藪とも書く。dhutaの漢訳。(中略) 煩惱をふり払い、貪りを去ることをいう。迷いを去り、けがれを除くための修行」(995)とあり、少なくとも仏教用語としても用いられることは疑いがない。しかし無論、高松氏の主とされる論を揺るがす事実ではないため、指摘に止める。

なお、この語の「ト／トウ」の揺れに関して、沼本氏(一九八二・第一章第二節「長音表記漢語の史的背景」)の述べられるところの、古代日本語がシラビーム言語であることに起因する一音節字の長音化現象であるとすれば(前掲の如く、北斗 ホクトウ(上上上上)等の例もある)、本音注は総合的に見て次のいずれかの性格を持つものと再認識出来る。

漢音形トの長音化 ↓声点の示す声調と合う ↓仏法部に漢音語が混ざる例
呉音形トの長音化 ↓声点の示す声調とずれる ↓声調と仮名音注がずれる例

「頭陀」について、『仮名書き法華経』の次の二例を見ればこの語が「ツダ」と読まれていたことが分かる。

例 これ戒へかいをたもち頭陀へつたを行へきやうくするものとなつく。(717-4)
例 つねに頭陀(上濁上濁)へつたの事へしを行(上濁)へきやうくし。(後略)
(875-2)

字類抄に「ツウタ」とあるのは、現象としては前項と同様であろうが、実際の場面で慣用的に「ツウダ」と読まれたものと捉えれば良いのであろうか(そもそも dhuta の音訳語である)。字類抄中に他に「頭」を「ツウ」と読んだ語はなく、またこの語は中巻の黒川本にしか見えない語であるため、誤写であることも考えられるが、「ツ」篇に収録されている以上、黒川本が独自に「トウタ」を誤った可能性はなさそうであり、やはり呉音の揺れと考えるのが妥当である。

*頭陀(図書寮本名義抄一九四二)

*頭風 俗云ツフウ(去濁上)(観智院本名義抄・仏下本二二)

*水頭 ヒツ(平上濁)(観智院本名義抄・仏下本二二)

B 除外②漢音・呉音のいずれとも一致しない要素を持つ語

6 論議(平平濁) 僧侶分/ロンギ(口前田上19オ)

…下字の声調がいずれとも一致しない語

(上字の声調・両字の仮名音注は漢呉同形)

124 加行(ー) 同(僧侶分)/ケキヤウ(ケ黒川中98ウ)

…上字の仮名音注がいずれとも一致しない語

(下字の仮名音注は呉音形、声点なし)

50 堅義(平平濁) 法會分/リウギ(リ前田上74ウ)

…声調は呉音系だが、仮名音注はいずれとも一致しない語

「論議」(法談。講演/講論。問答—中村146)の「議」は広韻去声字であるから、これとの対立からも字類抄が「平濁」とすることに問題はなさそうである。しかし『單字』(上、反切下字は去)、『音訓』(上濁)が漢音と対立しないために、ここに掲げたものである。『單字』『音訓』への漢音の混入か、両点字であるかのいずれかであろう。字類抄中の前掲「和議(去上濁)ワキ」については、音注が呉音形であるが、声調は漢音と対立せず、その他「朝議」「悲參議」等の語全ての「議」字に平声点が付されるのも、同様に解せない。

*論 禾ロン(平平)(観智院本名義抄・法上六八3)

*論議(音注同左、図書寮本名義抄七一4)

*議 音宜(平濁) 又義(去濁)(観智院本名義抄・法上六〇5)

「加行」は確かに慣用上「ケギョウ」と読んでいるが(中村も「けぎょう」(293)で

立項)、『音訓』に「カ」とあるのみで、他の音義類に(また字類抄中にも)「ケ」音注を確認出来なかったが、以下の例もあり、呉音「ケ」音のあるものと推察される。

*加〈ケ〉行(高山寺本大日経疏長治元年点七・六九五)

「豎義 リウキ」については、呉音は『大般若経』にも「シユ／ス／スウ」とある通りであり(漢音シユ、漢呉形ともに「ジユギ／シユギ」とありたいところである。「リウ」が諸声符に引かれた慣用読みであることは明らかであるが、この読みが本辞書に掲載されたことにより、漢字と音との結合のある程度までの定着と見ることが出来る。

なお、本辞書中に「内豎 ナイシウ」「豎者 リツシヤ」の例があることも、編纂者の無知からではなく当時慣用の読み分けを示したものと考えるのが自然である。なお「豎者」については、「豎者 りっしゃ(語義略) 豎は豎の俗字で、本来「じゅ」という音であるが、豎者と書いて古来「りっしゃ」とよみならわしている。立者とも書く」(中村1420)とある。

*豎 禾主(平)(観智院本名義抄・法上九〇八)

C 除外③音訳語

192 悉曇(入去) シツタム(シ前田下79ウ)

…声調は呉音系だが、下字の仮名音注が漢音形の語

(上字の仮名音注は漢呉同形)

「頭陀」と同様に、「悉曇」も音訳語(siddham)であるから、「シツトムと読むべき」等の議論は成り立たないものの、声調が呉音系であることには注目したい。

*曇 禾土ム(一上)(観智院本名義抄・仏中八九八)

【参考】仏法部中の音訳語一覧(頭陀・悉曇、また単字(偈・梵・仏・僧・塔・釈・禅等)を除く)】

29 菩提^レ 60 伽藍^レ 70 羯磨^レ 75 壇越^レ 87 南無^レ 92 烏瑟^レ 104 俱舍^レ

127 布薩^レ 137 護摩^レ 142 三昧^レ 170 維摩^レ (155 棄門^レ 67 加茶^レ)

D 漢音系に近い語

I 声調・仮名音注ともに漢音系の語

10 白馬(入上濁) 寺名／ハクバ(八前田上31ウ)

139 摘花(入平) 佛法部／テキクワ(テ前田下22オ)

34 登壇(平平濁) 同(僧侶分)／トウダン(ト前田上62オ)

76 靈驗(一) 佛法部／レイケン(レ黒川中14ウ)

II 下字の仮名音注が漢音形の語

(上字の仮名音注は漢呉同形、両字とも声点なし／入声点)

66 合詔(殺)(入入) カフサツ／云阿弥陀仏也(カ前田上107オ)

79 尊重(一) 佛法部／ソントウ(ソ黒川中18ウ)

129 鳧鐘(一) 寺家分／フシヨウ(フ黒川中106オ)

これらのうち多くについては、確かに仏法部語彙でありながら、意図的に漢音の音注が施されたものと考えるのが自然であろう。

「白馬」(中国の現存する寺名)に関して、字類抄内で「馬」字に付されるのは上声点(漢音、大部分が「ハ」音注を伴う)のみであり、他に「メ」の仮名音注はあっても声調は示されない。「インドから中国へ仏教が伝来したことをいう」意があり、『日本国語大辞典第二版』(以下、日国)、また中国の寺名もこの義に発するものか―望月佛教大辭典「白馬寺」項(4193)参照)、あるいは漢音読みが慣例であったのかもしれない。

*白馬白象之後、乳水暗合教(性靈集卷五・四五八)

*馬 禾メ(平)(観智院本名義抄・僧中九八4)

「摘花」も、声点・仮名音注ともに漢音を示す。「てきか 仏前に供えるために花を摘む」(日国)意で、仏法部語彙として相応しいが、あるいは日常行事化する中で、漢音読みになったものかもしれない。ただし、字類抄内で「花」字の声点が不審なものが二例ある。

*藤花(去去)トウクワ(置字)

*柳花苑(上上平)リウクワエン(人事)

これらは仮名音注が漢音形でありながら、声調は呉音を示している。他に「金錢(右傍)キムセム(平平)花コムセンクエ(下上上上上)俗」があるが、「クエ(花) || 上上(上)」と正しく示されている。「華」字で「クワ」音注を持つものは全て平声となっていることから、漢字への加点者が「花」字の声調を逆に捉えていた可能性もある。しかしその場合、仮名音注が漢音形であることを説明出来ない。

*摘 一花(観智院本名義抄・仏下本五八3)

「登壇」(戒壇にのぼり、戒法を受けること―中村1002)は仮名音注は漢呉同形であるが、声点が漢音を示す。字類抄中に他に「登天楽(去上―/人事)」「登臨(去―/置字)」のように「登」が呉音を示すものが存在するが、この二語は語義を考慮しても不審である。なお、「檀」字も字類抄中では全て平声で示される。

「靈驗」は、声点を有しないが、漢音形の仮名音注を持つ。この語は、漢呉両形(レイケン・リヤウゲム、後者は声調も呉音系)が字類抄仏法部に収録されているが、両者ともに「仏法部」を示す注文を有することからも、置字部中別部の語が紛れたと考えることは難しい。むしろ、漢音読みの根付き(例えば、仏教説話集等での語の読み方について)を示すものと捉える方が自然である。なお中村は「れいげん」(1437)を立項する。

*49靈驗(去平濁)同(佛法部) / リヤウゲム(リ前田上74ウ)

*76靈驗(一―)佛法部 / レイケン(黒川中14ウ)

*靈 禾リヤウ(一―上)(観智院本名義抄・法下六六2)

*殺 禾セチ(観智院本名義抄・僧上五九7・六六5)

「合諂」以外で字類抄に現れる「諂」の仮名音注は全て呉音「セツ」である。本項

「諂」の字義については不詳とされるが、少なくとも「殺生」を意味しないであろうことから、漢音読みをしていた可能性がある。

*合殺 がさつ⑤「かさつ」ともよむ。天台宗で行なわれた念仏称名の一曲調。入声で高く阿弥陀仏の名号を称揚する。「真言宗では『理趣経』読誦の終わりに、「毘盧遮那仏（ひろしやだふ）」と節をつけて繰り返し唱える」（中村183）

「尊重」に関しては、「ソソチウ」の誤写である可能性が残る。『仮名書き法華経』には、尊重へそんちうの読みが三例ある。また、『読経口伝明鏡集』に三点字として「重」があり、「尊重（去平濁）」の例を挙げる。中村は「そんじゅう」（892）で立項。

例 如来へよらいへは尊重へそんちうにして、智恵へち多へ深遠へしんをんなり。（仮名書き法華経385-6）

*重 禾地ウ（観智院本名義抄・法下四二五）

「甕鐘」（ふしょう 鐘。ここでは鉦鼓のこと—中村1182）も、誤写であるか、漢音読みの定着であるかは判断し難い。「鐘」字は呉音資料三種、広韻ともに平声を示す。字類抄中の「鐘」字については、「鐘樓シウロウ」「鐘（平）スウ」「籠鐘（平平）リヨウシヨウ」「鐘愛（平去）シヨウアイ」、関連字の「鍾」（広韻平声）も、「林鍾（平平）リムシヨウ」「鍾（平）シヨウ」「鍾樓（平平）スウロウ」とあり、語義と仮名音注（漢呉形）との対応等を見れば、編纂者が意図的に「甕鐘」を漢音読みした可能性は考えられる。なお、呉音資料の「鐘」字仮名音注は「主ウ」（『单字』）、「シユ／シユウ」（『音訓』）、「シユウ・シヨウ」（『大般若経』）である。

E 声調に漢音系・呉音系が混在する語

— 上字の声調が漢音系、下字の声調が呉音系の語

I 仮名音注—漢呉同形

35 長講（平平濁） 佛法部／チャウガウ（チ前田上69オ）

36 鎮護（平平濁） チンゴ（チ前田上69オ）

202 進善（去平） シンセン／幡名也（シ前田下80オ）

II 仮名音注—上字が漢呉同形、下字が呉音形

213 瀉（原字は卍+寫） 瓶（去上） シヤヒヤウ（シ前田下80オ）

III 仮名音注—上字が呉音形（清濁不問）、下字が漢呉同形

159 懺愧（慚愧）（去濁平濁） ハチハツ／同（僧侶分）／上—天／下—人／ザム

グヅ（サ前田下51オ）

IV 仮名音注—なし

152 三礼（平平） 同（法會分）／（以下擦消）サ■■■（サ前田下51オ）

I 誤点であるか、呉音両点字であるか（「鎮」は『金光明最勝経音義』で平声）、熟語として定着した声調型であるかのいずれかとなろう「注五」。なお、「進善」は呉音であれば「善」字が濁点であるべきであるが、下巻語であることから、清濁はかなり怪しくなっているようである。

II 「瀉瓶」(師が弟子にのこし漏らすことなく教えを伝えること―中村609)は「写瓶」に通じる。「写」は『單字』(反切下字去)、『音訓』(平)であり、『單字』を参照すれば、「写瓶」(去去↓去上)となり、字類抄と合う。『單字』系の音注を持つ資料に依拠したか、単なる誤点であるかは即断出来ない。ただし「瀉瓶」は仮名音注が呉音であると理解出来ることもあり、上字の声点が誤点とすれば解決する。

III 「懺愧」については次項目(F)で述べる。

IV 「三」字については、仏法部だけでも三昧・三歸・三明・三論の全てで去声点が付されているため、「三礼」(身・口・意の三つで、三たび礼拝すること。最上の敬礼―中村492)の(平平)は(去平)の誤りと見て良からう(広韻去声もあるが、三の意が具体的数字であろうために平声(呉音⇓去声)となる)。なお「三」は、『読経口伝明鏡集』にも上去両点字として挙がる。

F 仮名音注に漢音形・呉音形が混在する語

53 香花(去上濁) 佛法部/カウグワ(カ前田上107オ)

…声調は呉音系だが、下字の仮名音注が漢音形の語

(上字の仮名音注は呉音形)

158 懺慙(懺悔)(平平)同(僧侶分)/サンクエ/又下字悔(サ前田下51オ)

…上字の仮名音注が漢音形(清濁不問)、

下字の仮名音注が呉音形の語(声調は呉音系か)

「香花」(こうけ 仏に供える香と花)。「こうはな」ともよむ―中村394)は「カウグエ」であれば問題のない語である。誤写の可能性もあるものの、呉―漢の混ぜ読み(あるいは特定の語のみ両音字となるもの)として当時に定着していた語であるかもしれない。

「懺慙」は、「懺悔」か「慙(慚)悔」の誤写であると考えられるため、ここでは「懺悔」として処理した(少なくとも、「懺慙」をサンクエと読むことはない)。

呉音ではそれぞれセンクエ、センクヰの形が想定されるが、佐々木氏は、

□本書の加点者は、『廣韻』去声字の「懺」を、漢音サム・平声、呉音サム・去声と認識していたものと考えられる。これらのような、日本語化された漢音声調、とても呼ぶべきものを記した例を、三卷本『色葉字類抄』前田家本は含んでいる。(佐々木二〇〇六)

のように述べられる。そうであるとしても、「懺愧」は呉音―呉音型となり辻褄が合うが、「懺悔」は仮名音注・声調ともに漢音(清濁不問)―呉音型となり、漢呉混濁していることに変わりはない。他の可能性を考えると、

①あるいは加点者は、「懺」の呉音を「ザム」(平)と考え、「懺悔」の「懺」声点の濁点を落とし、「懺愧」の「懺」声点を誤ったものとも考えられる。これらの二語は、従来、清濁が曖昧であると論じられてきた二卷本時の下巻収録語に当たり、その可能性も少なからずある。

②あるいは字類抄中に左の如き例があることを考えれば、そもそも加点者が漢音サム

(平)・呉音ゼム(去濁)と声調や清濁を誤って認識していたという可能性もある(高い)ことになる。

【サム】懺(右傍)サム(平/人事)

【ザム】懺(ザムズ(去濁平軽(上か)上濁) (去濁/人事)

【セン】無懺(ムセン) (豊字)

しかし、そのような認識では次のようになり、結局混ぜ読みをしていることとなる。

・懺悔…上字漢音・下字呉音

・懺愧…上字漢音(声調清濁誤点)・下字呉音

③あるいは「懺」を「慚」(呉音ザム/去、漢音サム/平)の異体字として使用しているとすれば、次のようになろうか。

・慚悔…上字漢音(清濁誤点)・下字呉音

・慚愧…両字呉音系

すなわち、本文ですれるのは「慚悔」の「慚」字を平声(正しくは去声)としていることのみとなる。仮に「慚愧」のみ誤字(異体字)で「懺悔」は原本通り、と見なせば、「懺悔」(佐々木説、①②)の問題のみが残ることとなる(次表参照)。ただし「懺悔」を「懺慙」と誤った事情も考えねばならないだろう。

158懺悔			
字類抄	サソクエ	平-平	
漢音	サソクエ	去-上去	
呉音	センクエ	平-平か	
懺悔			
漢音	サムクエ	平-上去	
呉音	ザムクエ	去濁-平か	

159懺愧			
字類抄	ザムクキ	去濁平濁	
漢音	サソクキ	去-去	
呉音	センクキ	平-平か	
懺愧			
漢音	サムクキ	平-去	
呉音	ザムクキ	去濁-平か	

いずれにせよ、仏法部という特殊な部内で隣接する語の共通字に、清濁も異なる別の声点、別の仮名音注を付すというのは、余程注意散漫であるか、(漢呉音の理解/用字に誤りがあるにせよ)意図的に行った差声であったと考えざるを得ない。無論、別の可能性として、熟語によりそれぞれが特定の声調を持っていたということもあるかもしれないが、隣接語で上字が同意義の「ハツ」であることを考えても、納得し難い面がある。なお、図書寮本名義抄には漢音セン/平声の注記があり、本字への理解の混乱が見られる。〔注六〕

*懺一(悔)音尖(平)(二五二三)

*懺悔 さんげ 仏教では「さんげ」とよむ。(中略)「さんげ」とよむことも行なわれたらしい(中村497)

*懺愧・慙愧 さんぎ(中村499・500)

G 声調と仮名音注がずれる語 — 声調は漢音系(上字は漢呉同形)だが、仮名音注(上字)は呉音形の語

157 齋(齋)戒(平去)サイカイ(サ前田下51オ)

221 利柱(入去) 寺家(セ前田下110ウ)

これらは、声点の付け誤り(これらも下巻収録語)、あるいは左に引用した高松氏が述べられるように両点字となるものとして処理出来よう。あくまでも、仮名音注が編纂者の認識を表すものと考ええる方が妥当と考ええる立場からである。

□「方」、「戒」の方は、五戒(平平)戒牒(平入)に対する、今の「齋戒」の去声である。しかし、この字については、諸書等しく平声で以て一貫してあるが如くである。法華経でもゆれることがない。とすれば、或いは、この語においてのみ特例となり、従って、そのための両点となるものなのであろうか。(高松一九八〇a)

*齋戒 さごかい(中村448)

*利柱 せっちゅう 「せいちき」ともよむ。利竿に同じ(中村827)

*利竿 せっかん 仏寺の堂塔前に立ててある長い竿で、上に宝珠がつけてある。寺院で説法のあることを表示するために立てるしるしの旗(幡、幢)を掲げる竿(中村826)

また、下字が呉音形である直接の根拠の得られなかった語(三点字で、対立)として「長行」(じょうごう) 偈頌の対。経論のうちで散文で書かれた文章をいう―中村750)がある。

*39 長行(去濁上濁) 内典分/チャウガウ(千前田上69オ)

字類抄のうち「微行(平平濁)ヒガウ」(身分の高い人などが、他に知られないように身をやつて外出すること||日国「ビコウ」)は、「微」字が「單字」(ミ/去)、『音訓』(ミ/上去)であり、この場合の「行」は広韻平声(歩也適也往也去也)の意であろうから、仮名音注、声調ともに漢音と認めて問題なさそうであるが、上字が鼻音韻尾であることから連濁例としては不適切で、あるいは濁点は「微」のものが誤って下字に付されたものであろうか。

「ガウ」は直接「行」に「ガウ」と注した呉音資料は未だ管見に入らないが、広韻平声に二音あり(前述「歩也」庚韻、その他「伍也列也」唐韻があり、本語「長行」はこちらの意、それぞれ現代中国音 xing / hang に対応)理論上は呉音にゴウの形のあったことは推定出来るため、当時この語に関しては「長行 じょうごう」で定着した読み方であったのではないかと考えられる。

□「行」は、韻書の四点字である。これの呉音声点が、明鏡集で「梵行」と「修行」とに分れることがまず不可解である。それと同じき事情にありそうなのが、本書の「行者」と「行香」「行道」である。また、「梵行」と「経行」との関係も定かでない。が、若し斯く定っていたとするならば、それは最早穿鑿のしようがないものである。これは既に、先の、「誓願」「弘誓」の如きものであって、一般的にも、我が両点字にはその謂われの、よく推し得ないものが混ずるのである。(高松一九八〇a)

*『説経口伝明鏡集』に三点字として「長」「行」が挙がる。

【表八】問題点まとめ

語	問題点		分類	巻
84 頭陀	音訳語。長音化？	音訳語	僧侶分	中
191 悉曇	音訳語		内典分	下
39 長行	呉音？	慣用音／呉音か	内典分	上
124 加行	呉音？		法会分	上
50 豎義	慣用音か		僧侶分	中
32 斗藪	漢音or声調と仮名音注がずれる	漢音orズレ	僧侶分	上
10 白馬	漢音	漢音か	寺名	上
34 登壇	声調漢音・仮名音注同形		僧侶分	上
66 合殺	漢音		法会分	上
76 靈驗	仮名音注漢音・声点なし		仏法部	中
139 摘花	漢音		仏法部	下
79 尊重	誤写？仮名音注漢音系	誤写？	仏法部	中
129 鳧鐘	誤写？仮名音注漢音系	漢音？	寺家分	中
53 香花	誤写？混ぜ読みで定着？	誤写？ 慣用読み？	仏法部	上
152 三札	誤点か	誤点か	法会分	下
212 瀉瓶	誤点？写瓶？	誤点？	僧侶分	下
159 懺愧	異体字？漢呉混淆？誤点？	異体字？ 漢呉混淆？ 誤点？	僧侶分	下
158 懺悔	誤字。漢呉混淆？誤点？	漢呉混淆？ 誤点？	僧侶分	下
35 長講	誤点？两点字？	誤点？ 两点字？	仏法部	上
36 鎮護	誤点？两点字？		仏法部	上
157 齊戒	誤点？两点字？		僧侶分	下
201 進善	誤点？两点字？		幡名	下
220 刹柱	誤点？两点字？		寺家分	下
6 論議	議字の呉音声調に疑義	疑義	僧侶分	上

以上、声調／仮名音注が呉音系のもとの異なる例、疑義の残る二四例を概観したが、これを改めて整理すれば【表八】の通りである。本表より、分類、巻（上中下）による顕著な偏りは見られないことが分かるが、傾向としては、「内典分」（仏教の典籍に関わる語）の語よりも、「僧侶分」「法会分」所属の実際的な仏教行事関係の語の方が、呉音の体系から外れやすいということが言えるだろう。また少数ではあるが、明らかに漢音を示した一部の語に関しては、漢音を奨励していた国家が仏教行事を執り行っていたことと関係があるのかもしれない。

さて、全二二六語のうち前掲二四語が「一見呉音の体系から外れているように見える」ことが、本調査で判明した。中巻を中心とする仮名音注も声調も示されない語群を除けば更に母数が減ることを考えても、少なくとも「仏法部語彙は呉音で示される」という法則の成り立たないことは明らかである（ただし、それでも音注を持つ語のうち過半数が呉音を示すことは、仏法部語彙に呉音で示す前提のあるものと確認される）。誤写・誤点等の疑いの残るものに関しては、新たに善本が発見されない限り明確なことは

言えないであろうが、両点字の問題についてはまだまだ追究の余地があるだろう。

おわりに

以上のことから仏法部、また字類抄の性格にまで言及可能と思われる事項を次に述べる。ただし、第二項で述べた検証結果は繰り返し返さない。

○字類抄仏法部内には、漢音系の声調／漢音形の仮名音注を持つ語があるが、特に仮名音注に関しては、「当時の仏典以外の典籍の中で読まれる中で、そのような形に定着した蓋然性が高いもの」を採録したものと考えられる。このことは、従来沼本氏（注二①参照）の言われたように「色葉字類抄の掲出字には要するに規範的な観点から声点が打たれている」ものとは違う一面を示すものとしても確認されよう。一方、「定着」の傍証の得られないものについては、今後の課題として残る。

○字類抄仏法部内には、声調／仮名音注ともに、呉―漢あるいは漢―呉の混淆した形が散見される。このうち仮名音注が混ぜ読みである語については、ある程度成熟した読み方である場合がありそうだが、声点については誤点と考えられるものも少なくなく、特に「懺悔」「懺愧」等を見れば、次のような可能性も念頭に置いて本辞書の性質を云々すべきと言えよう。

□加点が複数人おり（その内には呉音声調等に通じない者もあり）同字注が混乱した。

□加点は本辞書の完成形の語の排列に従って行われた訳ではなく、加点あるいは語の補入の時期に複層性があるため、一見不条理に混乱したように見える（その場合、混乱は、加点時期か加点者の知識かに拠ることとなる）。

□加点は単字ごとに行われた訳ではなく、疊字としての結合を前提に為されたため、単字に分解すると一見不一致に見える語がある。

○字類抄仏法部語彙に付された音注を以て当時の呉音体系に帰納することの難しい面が改めて確認された一方で、仏法部が疊字部中の他部に比して異質であることもまた明らかとなった。すなわち、字類抄編者あるいは加点者が（跋文には編者が差声したことを窺わせる文章があるが）、漢音系の語を殆ど韻書に依拠して付したものは別に、仏教語については当代に日本で使用された語形を示そうとした仮名音注例が散見されたのである（声調については特定の依拠資料があるかもしれない）。誤点誤注の存在に注意しつつ、当時日本語化しつつあった呉音の声調や音読（両点字・両音字等）の資料として用いることは可能であろう。

一般に期待されるような呉音のみを示した純呉音資料が存在しない以上、字類抄の加点者の依拠した資料にも漢音の混入、誤り、偏りがあったことは当然であり、また字類抄の音注はそれを受け継いだ可能性も低くない。しかしそれでもなお、「懺悔」「懺愧」の例を始めとして、依拠資料あるいは字類抄独自の混乱に注目することは、今後も意義のある課題として残るのではないだろうか。

仏法部語彙は「仏法部」に意義分類された語群であるため、無論、声調によって同音

異義語を見分ける必要はなかったであろうし、韻文に用いられるとも考え難いのはあるが、それでも約七六%の語(前田本)が差声されていること(また他の韻字部語彙に紛れることなく、多くは呉音形を示す)からは、例えば、これらの語を口に出して唱える需要等、何らかの意義を想定していたものとも考えられる。筆者の重点部の研究(藤本二〇一一)に、重点(殷々等の語)には声点の差されないものが多い旨を示したことがあるが、一般的には、漢詩文類で用いられる語彙こそ声調表示が求められるはずであるのに、その割合は仏法部語彙の差声率を大きく下回るのである。

〔注一〕理趣経・孔雀経等のように専ら漢音で読まれた資料については、本調査の結果からも特に字類抄との関連を見出すことは出来なかったため、ここでは「典型的」な仏典と認定しない。一方で法華経・大般若経のように漢音が混入するとされる資料については語単位での比較が必要となるであろうが、今は「仏法部」の規範性を出発点とするため、「呉音を期待」するのである。

〔注二〕上上型(32斗敷)・去去型(184周通(匝))に関して、以下に沼本氏の御指摘①④掲げる(字類抄の当該例は引かれませんが、①では字類抄の仏法部以外の語を引用された)。これに依れば前者(斗敷)が④「二音節相当」のもの一群に準じ、後者(周通)が③の理由により入声点の差されない点が説明される。以下、「」内は引用。

① (沼本1982・五三二頁・五三五頁)

・「上声で初まる語とした『26袈裟』『29五鈷』の「袈」「五」ももと去声であったものが上声化した新しい形が示されていると見ることができ(「五鈷」は色葉字類抄では掲出字声点「去平」であってこの考えを裏づけ出来るものである。色葉字類抄の掲出字の声点に屢々和名抄声点本、両名義抄の声点と異なるものが存するのは、その声点が古い形―言い換えれば、声調変化しない段階の、呉音・漢音のそれぞれの正しい単字声調にもどして加えられている―を示している為である)と見得る場合が多い。従って、色葉字類抄の掲出字の声点は必ずしも当時の常用の漢語声調を示していないと見なければならぬ様に思われる。(注7)」「(注7) 本稿で「色葉字類抄」を主資料の一つとして取挙げなかったのは、正にこの理由に依るのであって、色葉字類抄の掲出字には要するに規範的な観点から声点が打たれているのであって、当時の生の姿を必ずしも伝えていないと考えられるのである。」

② (沼本1982・五三四頁)

・「上声で初まるものは、本来去声で初まったものが変化した新形である可能性が高い。」「語頭以外の漢字の声調は、語アクセントとしての安定化のために変化させられ、呉音本来の声調を保つ割合が非常に低かったと考えられる。」

- ③ (沼本1997・二一六頁)「九條本法華経音と妙一記念館本法華経の漢字声調の対照)」
・「九條家本入声字に本書で平声点の加えられているもの」として「匝 三匝(去平濁) 七匝(入平)」を挙げられ、(唇内入声字であるから)「本群の異例は、八行転呼音によってその韻尾「ふ」が「う」となり平声字と区別がつかなくなったという音韻的背景を持つものであるということが明らかである。」とされる。

④ (沼本1997・二四五頁)「二字漢語の声調(二二)」

- ・(妙一記念館本法華経で上上型を保つものについて)「一音節字で去声を保った例」は「功・終・充」であり、これらは「クウ」「ジュウ」「ジュウ」と「二音節相当として認識されたものであるから」「語頭での例外は殆ど無いということになる。」
- ・(同じく去去型を保つものについて)「なぜ上声化していないのかの理由については明確ではないが、或いは一語化していないと認識されたものということも考えられよう。」

【注三】「179誦経(シ前田下79ウ)」は所屬篇のみでは漢音(シヨウ)とも捉え得るが、呉音資料に「シユウ」、字類抄に「85念誦 ネンシユ」の例があることから、呉音(シユキヤウカ)と判断した。

【注四】次のような例(『单字』『音訓』にないか、呉音資料に揺れがある場合に、広韻とも一致し得るもの)は取り上げなかった。

色葉	字	音訓	单字	单字 反切下字		色葉 広韻
				去	去	
7	論匠匠	-	-	-	-	去濁 去
59	鴈塔塔	-	-	去(濁)	去濁	去濁 去
68	合黨黨	上	上	平/去	上	上 上
69	戒條條	-	-	平(濁)/上(濁)	平	平 平
219	誓願	平/去	去	去	去	去 去

【注五】沼本氏(1997)は、「平声字の上声・去声差声例」(二五五頁)、「去声字の平声差声例」(二五八頁)でそれぞれの理由の一つとして「語アクセント化を起こして平声から上声又は去声に変化した」「語アクセント化による変化に係わる例」のあることを挙げられた。ただしここに分類される型以外のものが字類抄に見えている。

【注六】亀井孝「懺悔考・女郎考」(1985、初出1959)は、「懺悔」の音を「サンゲ↓ザンゲ」と何故濁るようになったかを、主に「慚愧 ザンギ」との関係により論じたものであるが、下字(清音)や呉音形(セン)については全く触れていないため(清濁の別は明瞭である)としながらも、ここでは論文名を挙げるに止める。

【使用テキスト・索引】

- 『保延本 法華経单字』(貴重図書影本刊行會 / 1933)
- 『法華経单字漢字索引』(島田友啓編 / 古字書索引叢刊 / 1964)
- 『心空 法華経音訓』(貴重図書影本刊行會 / 1931)
- 『法華経音訓漢字索引』(島田友啓編 / 古字書索引叢刊 / 1965)
- 『法華経音義 三種』(古辞書音義集成 5 / 1980)
- 『安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經』
- 東辻保和「安田八幡宮藏大般若波羅蜜多經の音注(資料)」(「訓点語と訓点資料」44 / 1971)

東辻保和・岡野幸夫「安田八幡宮蔵大般若波羅蜜多經の音注(索引)」〔訓点語と訓点資料〕
119 / 2007)

- 『図書寮本 類聚名義抄 宮内庁書陵部蔵』(築島裕他編/勉誠社/1976)
『観智院本 類聚名義抄』(正宗敦夫校訂/風間書房/1955)
『校正宋本廣韻 附索引』(陳彭年等重修/藝文印書館校正/1967)
『長承本 蒙求』(築島裕編/汲古書院/1990)
『妙一記念館本仮名書き法華経』(中田祝夫編/靈友会/1988 - 1993)
『性靈集 一字索引』(静慈圓編/東方出版/1991)

【参考文献】(論文)

- 岩崎小弥太「名目雑抄」『金田一博士古稀記念・言語民俗論叢』/三省堂出版/1953)
櫻井茂治「三卷本『色葉字類抄』所載のアクセント―形容詞・サ変動詞について―」〔国学院
雑誌〕60 / 1959)
山田俊雄「読み癖・故実読み序説」〔国文学解釈と鑑賞〕25 - 10 / 1960)
山田俊雄「三卷本色葉字類抄の中の漢字音の清濁」〔二〇二二〕〔成城文芸〕25 / 1961)
鈴木真喜男「三卷本色葉字類抄の漢字音標記(一)―直音音注について―」〔文芸と思想〕24
/ 1963)
福永静哉「神宮文庫蔵零本『色葉字類抄』管見―声点表記を中心として―」〔女子大國文〕35 /
1964)
奥村三雄「漢語アクセント小考―三卷本色葉字類抄を中心として―」〔訓点語と訓点資料〕32
/ 1966)
鈴木真喜男「二卷本色葉字類抄における字音注の所在、および、直音音注」〔文芸と思想〕28
/ 1966)
いまとひでお「声点の分布とその機能(1)―前田家蔵三卷本『色葉字類抄』における差声訓
の分布の分析―」〔国語国文〕35 - 7 / 1966)
黒沢弘光「前田家本色葉字類抄疊字門の字音声点―清濁表示よりの考察―」〔言語と文芸〕9 -
5 / 1967)
河野六郎「日本吳音」に就いて〔言語学論叢〕15 / 1976)
二戸麻砂彦「前田家本色葉字類抄音注攷―1―同音字注の考察」〔国語研究〕42 / 1979)
高松政雄「吳音声調史上の一齣―色葉字類抄の声点―」〔岐阜大学教育学部研究報告 人文科
学〕28 / 1980a)
高松政雄「色葉字類抄の声点」〔訓点語と訓点資料〕65 / 1980b)
高松政雄「前田家本色葉字類抄の声点について」〔岐阜大学国語国文学〕15 / 1982)
高松政雄「中世仏家における吳音―心空―」〔国語国文〕52 - 5 / 1983)
沼本克明「読経口伝明鏡集(故山田孝雄博士蔵文安本、川瀬一馬博士旧蔵文亀本)解説並びに
影印」〔鎌倉時代語研究〕13 / 1991)
兪鳴蒙「三卷本色葉字類抄の反切注と出典(その1)」〔撰大人文科学〕1 / 1994)
梅崎光「色葉字類抄の声点小考」〔語文研究〕79 / 1995)
佐々木勇「改編本『類聚名義抄』と三卷本『色葉字類抄』の漢音」〔訓点語と訓点資料〕116
/ 2006)

加藤大鶴「呉音系字音を反映する二字漢語の抽出方法―『半井家本医心方』を用いて―【附資料】」（『国語学研究と資料』30／2007）

二戸麻砂彦「二巻本色葉字類抄の同音字注」（『山梨国際研究』3／2008）

二戸麻砂彦「鎌倉初期書写色葉字類抄の音注」（『山梨国際研究』5／2010）

藤本灯「三巻本『色葉字類抄』重点部の研究」（『日本語学論集』7／2011）

【参考文献】（書籍）

小松英雄『日本声調史論考』（風間書房／1971）

金田一春彦『国語アクセントの史的研究：原理と方法』（塙書房／1974）

中田祝夫・峰岸明編『色葉字類抄 研究並びに総合索引 黒川本影印篇』（風間書房／1977）

沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院／1982）

高松政雄『日本漢字音の研究』（風間書房／1982）

亀井孝『亀井孝論文集4 日本語のすがたとくろち（一）』（吉川弘文館／1985）

川瀬一馬『増訂 古辞書の研究』（雄松堂出版／1986）

高松政雄『日本漢字音概論』（風間書房／1986）

奥村三雄『日本語アクセント史研究―上代語を中心に―』（風間書房／1995）

沼本克明『日本漢字音の歴史的研究―体系と表記をめぐって―』（汲古書院／1997）

【辞典類】

『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行協会／1954-1957 増訂版）

『仏教語大辞典』（中村元／東京書籍／1975）

『密教大辞典』（密教大辞典編纂会編／法蔵館／1991 縮刷再版）

『日本国語大辞典』（小学館／2000-2002 第二版）

『織田仏教大辞典』（大蔵出版／2005 補訂縮刷版）

【使用データベース】

大正新脩大藏経テキストデータベース（SAT／東京大学文学部）

【付記】本稿は、「訓点語と訓点資料 第一三〇輯」（平成二五年三月）に掲載された原稿に若干の訂正を加えたものである。本稿を成すにあたり、肥爪周二先生には多くのご指導を賜った。記して感謝申し上げる。